ガヴリロ・プリンツィプ像の過去と現在
── 第一次世界大戦開戦 100 周年からの回顧 ──

村　上　　亮

ハプスブルク帝国の皇位継承者フランツ・フェルディナント夫妻が，セルビア人青年ガヴリロ・プリンツィプによって暗殺されたサライェヴォ事件は第一次世界大戦の直接的な契機として知られている。しかしプリンツィプの評価は「英雄」と「テロリスト」の間で一致をみておらず，その対立は大戦勃発 100 周年の際にも表出した。すなわち，近年大きな反響を呼んだクリストファー・クラーク『夢遊病者たち』が第一次大戦についてセルビアの開戦責任を示唆し，プリンツィプを「テロリスト」と断じたことは，大戦をハプスブルクやドイツに対する防衛戦争，あるいは自国の解放戦争と位置づけ，プリンツィプを「英雄」とみるセルビアの立場とは相反するものであった。そのためクラーク書へのセルビア国内の反発は根強く，同書に対抗するための『セルビア人と第一次世界大戦』が刊行されたのである。以上をふまえつつ本稿で明らかにしたのは主に次の 2 点である。

第一は，プリンツィプは両大戦間期以来，時代ごとの政体によって恣意的に利用され，プリンツィプのもつ重要性には時代により相違がみられたこと，ユーゴスラヴィアではとりわけ冷戦後に民族ごとにその捉え方が分裂したことである。第二は，『セルビア人と第一次世界大戦』が政治と学問の合作であり，同国の伝統的な第一次大戦観を強化，周知するためのものであること，同書の背景には現在のセルビアがおかれている国際情勢の影響が認められることである。

1　序　論

本稿は，第一次世界大戦勃発の直接的な原因，オーストリア・ハンガリー（以下，ハプスブルク）帝国の皇位継承者フランツ・フェルディナント夫妻が殺害されたサライェヴォ事件（1914 年 6 月 28 日）の犯人であるガヴリロ・プリンツィプ像の変貌の経過をたどるとともに，それに付随する，第一次世界大戦の開戦責任論争との関係を明らかにすることを目指すものである。

近年，わが国においても第一次大戦をめぐる研究が数多く刊行された。そのなかで池田嘉郎が指摘した，開戦 100 周年の時点から大戦を振り返る意義は傾聴に値する。「暦に

時間を区切ることで，過去の出来事を振り返り，自分たちの位置を測り直すことは，歴史の堆積のなかで生きている私たち人間にとって，優れて能動的な行為なのである。歴史感覚の喪失がはなはだしい今日，そのような作業はいつにも増して必要であるはずだ」と[1]。この回顧において生じうる争点としては，いつを記念日とするのか，そして何を記念するのかという問題があげられるだろう[2]。

本稿では以上の問題を考えるために，サライェヴォ事件を題材としたい。大戦勃発100周年に際してヨーロッパ連合（EU）の諸国は，サライェヴォにおける関連行事用の基金として「サライェヴォ―ヨーロッパの心」を設立した。その目的は「紛争なき将来のために平和，対話，連帯を促進する[3]」ことにあった。ところが，セルビア政府とボスニア・ヘルツェゴヴィナ内のスルプスカ共和国[4]は記念行事をボイコットした。その原因としてはウィーンフィルのコンサートをはじめとするエンターテイメント的な催しに加え[5]，ハプスブルク期に建設された旧市庁舎に掲げられた記念碑への反発をあげねばなるまい。ここには，ボスニア・ヘルツェゴヴィナ（以下，ボスニアとする）内戦中の1992年8月25／26日の夜，セルビア人勢力の砲撃を受け200万冊の蔵書が焼失した旨が書かれたうえで，これが「セルビア人の犯罪 Srpski Zločinci」として糾弾されている（写真1）。

この会場におけるウィーンフィルの演奏は，ボスニアの過去と将来をハプスブルク，そしてヨーロッパ連合と結びつけるという意味ではきわめて象徴的なものであった[6]。ボスニアにおける主要三民族のひとつをなすイスラム教徒（ボシュニャク人）は，かつての

写真1　サライェヴォ市のホールに掲げられた記念碑（撮影：筆者）

ユーゴスラヴィアに拒否反応を示す一方,「法と秩序」が保たれたハプスブルク支配（1878－1918年）を将来の模範として捉えている[7]。もっともこれはセルビア人の見方とは相容れないものであった。旧ユーゴスラヴィア，なかんずくセルビア人研究者は自らの政体を正当化するためにハプスブルクの統治を帝国主義的，植民地主義的なものとみなし，もっぱら否定的に評価したからである[8]。そして，この枠組みはプリンツィプの評価とも密接に連動する。以下の表のように，ボシュニャク人やクロアチア人にとってプリンツィプは「テロリスト」であるのに対し，セルビア人にとって彼は「英雄」である[9]。

表　ハプスブルクによるボスニア支配とプリンツィプの評価

	ボシュニャク人，クロアチア人	セルビア人
ハプスブルク支配	肯定的	否定的
プリンツィプ	テロリスト	英雄

サライェヴォでの記念式典をボイコットしたセルビアとスルプスカ共和国は，対抗措置として人造都市アンドリチグラードを開設した。「大セルビアのディズニーランド[10]」と称される同施設は，セルビア人の英雄たちを集積したものである。スルプスカ共和国はここでセルビアの協力のもと，第一次大戦の追悼とプリンツィプの英雄的行為を結合させるとともに，ハプスブルクの軛からのセルビアの解放を全面に掲げた。セルビア側はサライェヴォ事件100周年をどのように記念するかという論争が起こった際，すでに守りを固めていたといえる[11]。

セルビア人がこのように準備を整えていた背景には，第一次大戦の開戦までの過程を分析した諸研究のなかで「真に画期的な重要性をもつ成果[12]」と評されるC・クラーク『夢遊病者たち[13]』（2012年）の存在がある。クラーク書の概要や開戦責任論争における本書の意義については別の機会に論じたため[14]，ここでは本稿と深く関わる3点のみを記しておく。第1は，クラーク書がF・フィッシャー『世界強国への道[15]』以来，斯界の主な潮流であった開戦にまつわる相対的に重い責任をドイツに認める見方を退け，その追及を拒否した一方，セルビアやロシアの責任を示唆したことである。第2は，サライェヴォ事件の主犯をセルビアの秘密組織「統一か死か（通称は黒手組）」と断定し，プリンツィプに「テロリスト」の烙印を押したことである。第3は，ハプスブルクのボスニア支配が複雑な宗派＝民族状況にもかかわらず平穏な状況を保持し，一定の経済発展をもたらした点を評価したことである[16]。

前述のように，セルビアではハプスブルク支配を倒したプリンツィプを英雄とみなし

ているうえ，フィッシャー説に立脚しながらサライェヴォ事件を大戦の「原因 cause」ではなく，ハプスブルクが戦争を仕掛けるための「口実 pretext」ととらえ，第一次大戦をハプスブルクやドイツに侵略された「ゴルゴタ」と位置づけている[17]。それをふまえると，クラーク書への反発は想像に難くない。セルビアの研究者 A･ラストヴィチはクラーク書の高い評価を「不幸なこと」と断じ，クラークに加えて一部の英語圏の研究者がセルビアに開戦責任を負わせる一方，ハプスブルクとドイツの責任を免じたこと，プリンツィプが属していた「青年ボスニア[18]」がアルカイダと比定されたことを論難する[19]。H･ズントハウセンは，プリンツィプ評価の両義性について「セルビア人の土地を解放するための英雄的行為はガヴリロ・プリンツィプの記憶の一面であった。他方でこの暗殺は野蛮な行為として国際的に非難された[20]」と評する。実際にはプリンツィプの捉え方はどのように変化したのだろうか。後述するように諸外国では多くの研究がみられるが，わが国ではほとんど検討されていない主題である。

クラークによるセルビアの開戦責任の糾弾に対しては，一方では「誰にも罪がない」とされているのに，他方では2つの「EU 圏外の国」，正確を期せば「いわゆる国際社会の外側」にあるセルビアとロシアに開戦責任が向けられた，と主張した M・ビェラヤツ[21]をはじめ，セルビアでは多くの反論がなされた。それは『夢遊病者たち』に反駁するために官民一体となって編まれた『セルビア人と第一次世界大戦[22]』に結実する。はたしてセルビア側は，どのようにしてクラーク書への反撃を試みたのだろうか。ここではプリンツィプの評価とサライェヴォ事件の評価が不可分であり，大戦勃発に関する自国の責任がセルビアにおける議論の核心をなしていることを銘記したい[23]。さらに J･ウィンターが指摘したように，イギリス，フランス，ドイツなどの追悼では第一次大戦の戦死者が殉教者から犠牲者へと変容する一方，ロシアやトルコでは依然として殉教者として扱われ，この2つの断層線がセルビアにあるという[24]。これらを念頭におけば，プリンツィプの評価の変移と開戦責任論争の関連の解明には学術的な意義があると考える。

以上をふまえて本稿では，まずプリンツィプ像の変遷について先行研究を中心に跡づける。ここでは，両大戦期から旧ユーゴスラヴィア内戦に至るまでの政治情勢との関連とともに，プリンツィプを中心にサライェヴォ事件にまつわる記念碑にも着眼する[25]。そのうえで，『セルビア人と第一次世界大戦』の概要とその問題点を整理する。これらの考察を通じて，プリンツィプの政治利用のさまを明らかにするとともに，サライェヴォをひとつの定点として今日における第一次大戦の意義を展望したい。

2　プリンツィプ像の変遷

プリンツィプは，サライェヴォ事件の裁判のなかでハプスブルク期における農村の貧困，セルビア人にとってきわめて重要な意味をもつコソヴォの戦い（1389 年 6 月 28 日）と同じ聖ヴィトの日におけるフランツ・フェルディナント大公の訪問，そして大公が抱いていたとされる「三重制」構想などを暗殺の動機としてあげている[26]。ただしプリンツィプの発言で注目すべきは，彼がセルビア人ではなく，南スラヴ民族の統一を掲げていたことである。つまり「私〔プリンツィプ〕は南スラヴの民族主義者であり，オーストリアから解放された南スラヴ民族による統一国家の創設を目指している[27]」と供述した。

裁判の結果，プリンツィプは未成年ゆえに死刑を免れ，懲役 20 年，1 ヵ月につき 1 日の断食，毎年 6 月 28 日には独房監禁とする判決を受けた（1914 年 10 月 28 日）[28]。収容中の待遇は非常に悪く，孤独と飢え，疾病に苦しんでいたことはプリンツィプと面談を重ねていた監獄担当医師 M・パッペンハイムの記録にわかる[29]。結局，プリンツィプは大戦終結の報を聞くことなく，テレージェンシュタット（現テレジーン）の監獄において肺結核で亡くなり（1918 年 4 月 28 日），無名の墓地に葬られた[30]。

第一次大戦後に誕生したセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（以下，ユーゴスラヴィア王国）以来，この国におけるプリンツィプの評価は時代や立場に応じて移り変わってきた。R・ドーニャや H・カムベロヴィチの論考をまとめるならば，概ね以下のように整理できる。①南スラヴの民族的英雄（1918 － 41 年），②犯罪者への回帰（1941 － 45 年），③革命を起こした若き英雄（1945 － 70 年代），④有名人（1970 年代－ 1992 年頃），⑤テロリストと英雄への断絶（1992 年頃－現在）である[31]。以上の区分はひとつの目安としては有用であるが，次の 2 点を閑却してはならないだろう。第 1 は，ユーゴスラヴィア王国が「大戦間期の東欧諸国のうちで，歴史・政治的伝統・社会経済的水準・法体系・宗教・文化のどの指標をとってみても，最も複雑な国家[32]」だったこと，第 2 は，第一次大戦の他の参戦国と異なり，相対的にみれば民族的に「同質な」セルビア国家が大戦後には版図を大きく広げた「多民族的な」ユーゴスラヴィア王国に膨張したことである[33]。ここでプリンツィプ評価の変転をたどっておきたい。

2.1　冷戦終結まで

第一次大戦の終結とともにハプスブルク帝国は崩壊し，ボスニアはユーゴスラヴィア

王国の一角を占めることになる。ユーゴスラヴィア王国政府はハプスブルク支配の痕跡の除去に努め，第一次大戦中に建立されたフランツ・フェルディナント夫妻の追悼碑（1917年6月28日）をはじめ，フランツ・ヨーゼフの肖像などは撤去された[34]。一方，1920年の汎スラヴ・ラリーの際にプリンツィプら5人の遺体がサライェヴォに運ばれ，埋葬がおこなわれた[35]。しかしこの式典に関与しなかったように，ユーゴスラヴィア王国政府はプリンツィプの称揚に後ろ向きだった。時の国王アレクサンドルは大戦の記念日や記念式典には数多出席し，大戦にまつわるセルビアの記憶を作りあげる過程には積極的に参画したにもかかわらず[36]，プリンツィプ信仰を軽視し，暗殺犯の家族への経済的支援には否定的だった。アレクサンドルがプリンツィプの「英雄化」を望まなかったと思われる[37]。

この文脈では，以下の2つの条件にも目を向けるべきだろう。第1は，ユーゴスラヴィア王国には第一次大戦の勝者と敗者が混在した事実である。端的にいえば，セルビア人は「勝者」だったのに対し，旧ハプスブルク軍の一員として戦ったクロアチア人やスロヴェニア人，ボスニアのイスラム教徒は「敗者」だった。第一次大戦の記念にあたっては，あくまでセルビア人が賞賛の対象とされた[38]。第2は，開戦責任論争におけるセルビアに批判的な見方の出現である。とりわけ大きな影響力をもったS・B・フェイの著作がセルビア政府の責任に論及したことは看過しえまい[39]。

プリンツィプの記念碑が建立されたのは，1930年のことである。そこには「ガヴリロ・プリンツィプは1914年の聖ヴィトの日，この歴史的な場所において自由を宣言した[40]」と記された。実際にこれを目にしたR・ウェストによる同記念碑の控え目な文言，見逃してしまうほどの高所への配置に関する指摘は，設置への消極性を示すものであろう[41]。国王アレクサンドルの暗殺（1934年10月9日）後，コソヴォの戦いとサライェヴォ事件の記念行事が統合（1939年6月28日）され，プリンツィプらの追悼行事に政府関係者も出席した（同年10月）[42]。一連の動向からはプリンツィプ評価の微妙な変化がうかがえる。

もっともプリンツィプの記念碑は，第二次大戦中にユーゴスラヴィアに侵攻したドイツ軍によって奪取され，52歳の誕生日の贈り物としてヒトラーに贈られた（1941年4月20日・写真2）[43]。これを報じたナチの機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』は，プリンツィプらを「ユダヤ人，フリーメイソン」と非難したという[44]。

第二次大戦後の共産党政権により，プリンツィプの評価は大きく転換する。ティトーにより再統一されたユーゴスラヴィアにおいて，プリンツィプは共産党の方針に即して共産主義革命の先駆者に位置づけられ，パルチザンのナチへの抵抗と青年ボスニアのハ

写真２　ヒトラーに贈られたプリンツィプの記念碑[45]

プスブルクへの抵抗が等置されたのである[46]。この原因のひとつは，プリンツィプの甥にあたるS･プリンツィプがパルチザンの「勇士」だったことにもとめられる。換言すれば，共産主義者にとってプリンツィプ一族を英雄として受け入れやすいものとなった[47]。ティトーの共産党政権に関しては，プリンツィプの評価におけるイデオロギー的な色彩が濃くなったこと[48]，ユーゴスラヴィアとソ連の関係悪化[49]により第一次大戦が「解放戦争」として強調されたこと[50]を補っておく。

サライェヴォ事件の現場であるラテン橋はプリンツィプ橋に変更され，以下の文言が刻まれた新たな記念碑も設けられた。「1914年6月28日，ガヴリロ・プリンツィプの銃弾はこの場所から圧政に対する民族の抵抗，そしてわが民族の何世紀にもわたる自由への熱望を表明した[51]」と。暗殺40周年には「青年ボスニアとガヴリロ・プリンツィプ博物館」が開設され，暗殺現場にはプリンツィプの「足跡」もつくられた。これは「サライェヴォ事件とガヴリロ・プリンツィプ称賛の頂点[52]」とみて差し支えないだろう。大戦間期とは異なり一連の行事がサライェヴォ市評議会によって催されたように，官製行事の性格が強まった。暗殺50周年はプリンツィプの称賛だけではなく，ユーゴスラヴィアの２つのイデオロギー的な成果，すなわち自主管理と非同盟を誇示する場として利用された。もっともスターリンの死後（1953年３月５日）のソヴィエト連邦とユーゴスラヴィアの関係改善により，サライェヴォ事件の記念が10年ごとの式典に限定されたことからは，プリンツィプの政治的な利用価値が徐々に低下していたことを推知できよう[53]。

当該期には，暗殺やこれに関わった「青年ボスニア」に関する研究書や回顧録が次々

に刊行された。それらのなかで最も注目されたのはV･デディエールの著作である。彼は「青年ボスニア」の暗殺者たちを「素朴な反逆者」として描き，「革命によるハプスブルク帝国の破壊」を目指したその行動についてはハプスブルクによる植民地支配への正当な抵抗とみなす公式筋の意に沿った論を展開した[54]。さらに彼が，コソヴォの戦いとサライェヴォ事件を結びつけたことにも注意しておきたい[55]。この関連では，イギリスの研究者A・J・P・テイラーの一節に触れておくべきだろう。彼はサライェヴォ事件について「混乱の極みにある聖パトリックの祝日にイギリス王族がダブリンを訪問したならば，彼も撃たれただろう[56]」と記し，聖ヴィトの日（6月28日）におけるフランツ･フェルディナントのサライェヴォ訪問が，セルビア人の民族的感情を刺激したと述べる。暗殺を正当化する方便としてのコソヴォ神話は，セルビアにおける研究に度々登場することになる[57]。

なお当時の状況を考えるうえで見逃せない要素は，開戦責任論争において前掲のフィッシャーの所論が優勢を占めていたことである。およそ900頁に及ぶフィッシャー書がプリンツィプに一切触れていないというズントハウセンの指摘をふまえるならば[58]，当時の論争においてサライェヴォ事件の背後関係やセルビアの関与をめぐる問題は関心外であったといってよい。またデディエールの著作が，サライェヴォ事件の原因をハプスブルクの統治政策に求めたフィッシャーの弟子にあたるI･ガイスに影響を与えたことにも留意しておきたい[59]。

2.2　旧ユーゴスラヴィア内戦後の変化

プリンツィプの評価が激変する契機は，冷戦の終結とユーゴスラヴィアの解体である。スロヴェニアやクロアチアが分離独立に進むなか，ボスニアではヨーロッパ共同体（EC）による独立の承認後に内戦が本格化する（1992 − 95年）。独立に反対するセルビア人と独立に賛成するボシュニャク人，クロアチア人による三つ巴の内戦が展開され，それにセルビア（ユーゴスラヴィア連邦），クロアチア双方が介入した。内戦のさなかにプリンツィプの足跡は行方不明になり，プリンツィプ橋の名称は元のラテン橋へと復帰した。

この内戦は相互応酬的であったにもかかわらず，巧みな宣伝活動によってセルビア人による「民族浄化」が一面的に伝えられた。セルビア人によるスレブレニツァの虐殺[60]は大々的に報道され，国際的に厳しい批判を浴びた。しかしクロアチアからのセルビア人追放はほぼ伝えられず，アメリカもクロアチアの侵略的行動を黙認した[61]。さらにコソヴォ内戦がセルビアの「悪玉」化を加速させた。1980年代後半から悪化していたコソ

ヴォ情勢は，ボスニア内戦後もセルビア人，アルバニア人双方にとって満足できる解決がなされなかった。テロをいとわないアルバニア人の「コソヴォ解放軍」とセルビア軍との衝突が激化するなかで，NATO はもっぱらアルバニア人を擁護し，NATO 軍のユーゴスラヴィア全域への駐留などセルビアの国家主権を侵害する条件を突きつけた。それが拒否されたため，NATO はセルビア空爆を敢行したのである（1999 年 3 － 6 月）[62]。

このようにボスニアとコソヴォの内戦を通じてセルビア＝「悪玉」論が広まり，「大セルビア主義[63]」という用語によってセルビア・ナショナリズムが非難された。「大セルビア主義」の刺激の強さは，これに反論する書物がセルビアで編まれたことにより例証されよう[64]。同書のなかで L・タディチは「大セルビア的な覇権主義」に対する残虐な闘争が，①第一次大戦ではハプスブルクによるセルビア人の絞首刑や強制的な拘束，②第二次大戦ではウスタシャによる強制収容所，③コソヴォ紛争では NATO による野蛮な爆撃を正当化するために使われたと論じる[65]。セルビア人はボスニア内戦，コソヴォ紛争による旧ユーゴスラヴィアの崩壊を国内の諸民族，NATO，EU といった「外部勢力」による解体と捉え，もっぱら犠牲者意識を募らせていたのである[66]。

また西側メディアがプリンツィプとボスニアのセルビア人を結びつけたことにより，セルビア人全般とともに，プリンツィプの評価も悪化した[67]。これに対するセルビア側による反撃のひとつは，前掲したプリンツィプの記念碑を眺めるヒトラーの写真（写真 2）をセルビアの週刊誌『ヴレーメ Vreme』に「青年ボスニアに対するヒトラーの復讐」として掲載したことである（2013 年 10 月 31 日）。プリンツィプとヒトラーは直接結びつかないにもかかわらず，プリンツィプをヒトラーの侵略の被害者とする虚構を作りあげた。この説明はドイツを「悪者」と再確認させる印象操作に他ならない。ミレティチはこの意図について，プリンツィプが「オーストリアのみならず，ナチに対する闘争の象徴に使われた[68]」と記す。

以上のようにボスニア内戦とコソヴォ紛争を経て，欧米各国におけるセルビアの声望は大きく損なわれると同時に，セルビアにおける欧米各国に対する反感が高まった。このようなセルビア＝「悪玉」という図式は，冷戦期の西側陣営で「邪悪」とされたソ連や共産主義の代役をセルビアに担わせたと考えられる[69]。このなかでプリンツィプはセルビアにおいて外国からの干渉に対する象徴となった。かつてハプスブルク支配に立ち向かったプリンツィプの姿は，欧米に立ち向かうセルビアの姿に重ね合わされたのである[70]。

3　開戦責任論の「再発」？

冒頭で触れたクラーク『夢遊病者たち』は近年の開戦責任研究において大きな反響を呼んだ著作であるが，すでに指摘したようにいくつかの問題を抱えている。具体的にいえば，各国の開戦責任を問わない姿勢を示しつつも，客観的な証拠を示すことなくドイツとハプスブルクの責任をセルビアとロシアに転嫁したこと，ならびにセルビアの暴力性を再三にわたって強調したことである。

第1の点については，クラークはセルビアの民族主義を大戦の原因とほのめかしているが，ドイツとハプスブルクの決断がサライェヴォ事件を戦争に至らしめたことを等閑視したものである。またセルビア政府がサライェヴォ事件に直接関与した可能性は皆無といって差し支えない[71]。M・J・カリチは，クラーク書が多くの頁をセルビアに割きながらも新たな資料を用いていないばかりか，基本文献に位置づけられるA・ミトロヴィチの研究を取りあげていないことに論及する[72]。紙幅の都合上，ここでは次の点のみを補足しておこう。クラークは，ハプスブルクとセルビアの係争をハーグ常設仲裁裁判所に付託するセルビア側の提案について，その目的にふさわしい国際法体系や拘束力をもつ処分をおこなえる国際機関がなかったと否定的に論じている。しかしドイツがハーグ国際平和会議（1907年）で国際仲裁機関の設置を拒否した点には留意すべきではなかろうか[73]。

第2の点については，第一次大戦前より広まっていた西欧からバルカンに向けられた「暴力，野蛮，未開」という蔑視は，冷戦時代には一旦忘却されたが，ユーゴスラヴィア内戦によって復活，定着したこと[74]，さらにボスニア内戦以来「セルビアを大国政治の単なる客体，あるいは犠牲者とはますます考えにくくなり，セルビア民族主義を特有の歴史要素として認識することがこれまで以上に容易になった[75]」というクラークのような見方が広まったことを押さえる必要がある。セルビア側からみれば，ハプスブルクにとって「創作」されたかつてのセルビアに関する野蛮な言説が国際情勢によって再発したといえる[76]。

『夢遊病者たち』がセルビア政権とその政治の「残虐さ，ずる賢さ，悪辣さ[77]」を浮き彫りにしたと評されるように，クラークはセルビア政治や社会の暴力性を過度に強調しているうえ，第一次大戦前夜からボスニア内戦までの歴史的経緯を軽視している。これに関してはD・ジョキチの一節を引いておこう。「本書〔クラーク書〕は20世紀の南東欧に関する知識をごくわずか，あるいは，まったく持たない読者層にはきわめて面白く

読める。不幸なことに，その面白さは現在の価値基準を過去に当てはめる著者の考え方やクラークのバルカン史に関する不正確で誤った知識により損なわれている[78]」と。以下では，セルビア側のクラーク書に対する反応をたどってみたい。

3.1 『セルビア人と第一次世界大戦』の背景

冒頭に記したように，『夢遊病者たち』はセルビア国内で激しい反発を惹起した。ユーゴスラヴィア内戦時のセルビアによる犯罪行為への指弾にはほぼ無反応にもかかわらず，メディア，政治家，歴史学者は足並みをそろえてクラーク書を徹底的に論駁したのである[79]。ベオグラード大学のL・ディミチは，ヨーロッパ連合におけるドイツの威信と力の高まりがドイツ，オーストリアの責任を軽減する修正派の背後にあると指摘した。ミレティチは西欧の陰謀からセルビアの名声や国家利害を守ることを呼びかけ，フィッシャー説に固執するディミチらの言動を「学者というよりも国家役人」と巧みに言いあてている[80]。

さらに前掲のラストヴィチは，セルビアの開戦責任に言及するクラークをはじめとする英語圏の研究者が歴史的事実を偏向的に修正したと断じ，あくまでフィッシャー説を墨守する[81]。M・ラドイェヴィチとディミチの共著は，あえてクラーク書に言及することなく歴史修正主義への疑義を記すとともに，ハプスブルク帝国が長年にわたりセルビアに対する「局地戦」を準備していたこと，サライェヴォ事件は開戦の原因ではなく，口実にすぎなかったことを書いている[82]。

ここからは『セルビア人と第一次世界大戦』に焦点を絞ってみよう。本書は国際会議を元に編まれた論文集である。同会議の組織委員会委員長D・R・ジヴォイノヴィチによれば，この企画はセルビア学術アカデミーにスルプスカ共和国の機関も加え，ハプスブルクによるセルビア攻撃100周年を追悼するために計画された。目的としては，外国の領土から自らの領土を解放するために戦ったというセルビアの独特な立場を示すこと，セルビアに向けられた大戦の勃発，サライェヴォ事件に関する根拠のない誤った見方を晴らすことが語られる。「何人かの人物による，多くの誤りのある，限りなく不完全な発言や文章を正すことを望む」との言葉は，クラークに向けられていることは間違いない[83]。目次を一瞥すると従来のセルビアの主張に沿うセルビア人研究者，ならびにフィッシャー説に拘泥するJ・C・G・レールなどの研究者から構成されていることがわかる。

まず会議の冒頭になされた，セルビア大統領T・ニコリチによる式辞を次の4点にまとめておきたい。①自由を求めたセルビアの闘争，それは「100年にわたり全世界で不朽の

偉業，そして真実と正義のための模範として称賛されてきた」にもかかわらず，傷つけられつつあること。②ドイツの開戦責任を相対化しようとする試みはフィッシャーによって終止符が打たれたこと。③サライェヴォ事件とスレブレニツァを結びつけるクラークのような「極端な視座」はきわめて稀であること。④オーストリアの「最後通牒」（1914年7月23日）に対するセルビアの最大限の譲歩は周知の事実であること。言い換えると，侵略者はオーストリアであり，セルビアはその犠牲者であること，真っ当な研究者はセルビアを「大戦の被告」とはしないことである[84]。

またニコリチは，時のハプスブルクの軍人でありボスニア総督O・ポティオレクが困難な状況を打ち破る手段として「不可避の大戦争」に言及し，セルビアが来るべき戦争において公然たる，そして厄介な敵国となる旨を記した文書（1913年5月28日）を盾として，ハプスブルク側の戦争への意志を強調した。さらに彼は，クラーク書に対して「今日われわれがなすべきことは，歴史的事実を捻じ曲げようとする試みと戦うための言葉と行動のみである」とまで言い切る[85]。セルビア学術アカデミー代表N・ハイディンは，ニコリチに呼応し，大戦の開戦責任をロシアとセルビアに認める勢力に対し「彼らは，セルビアが敵から自国を防衛するため，そして名誉を保持するために戦争を強いられたことを忘却している。この過程でセルビアは高い代償を払い，多くの人命を失い，物質的喪失を被った[86]」と力説した。一国の元首が他国の研究者を公の場で罵倒し，それに研究者が加勢するさまには若干の違和感を禁じえないが，ここでは第一次大戦がセルビアにおいて時事的な案件であること，政治と学問が密接な関係にあることを確認しておきたい。

3.2 『セルビア人と第一次世界大戦』の概要とその問題

本書をつらぬく論調は，セルビアにおける伝統的な第一次大戦観，すなわちサライェヴォ事件はハプスブルクの失政の帰結である点，セルビアにとって大戦は自衛，あるいは解放戦争だったという点，ハプスブルクの侵略によってセルビア人が非常に多くの犠牲を払った点にある。マルコヴィチは，大戦におけるセルビアの軍人と文民犠牲者を100万から130万と算出し，これがセルビアの人口の約4分の1に相当すると論じた[87]。紙幅の都合上すべての論考を分析できないため，ここではその一部を紹介しておこう。

M・エクメチチは，サライェヴォ事件の再検討をおこなう。彼は，両大戦間期における重要な研究，P・ルヌーヴァンの著作を引きつつサライェヴォ事件の背景として，①警察の共謀，②ハンガリーの共謀，③政治的犯罪の3点を挙げ，①の可能性が高いと示唆す

るとともに，前掲のフィッシャーをふまえてドイツの開戦責任が一番重い旨を記している。しかしルヌーヴァンが暗殺の背景に関わる以上の3点を完全に否定しているうえ，それが明記されていないことは，エクメチチ論文の学術的な信頼性を大きく損なわせる[88]。エクメチチがスラヴ人の入植以来，ボスニアをセルビア人の土地とみなす民族主義的傾向をもつ人物であることも忘れてはならない[89]。

D・バタコヴィチは，ハプスブルク支配を批判する一方でプリンツィプによる暗殺の正当性を明確に主張する。つまり，「青年ボスニア」による抵抗運動を植民地支配に対する革命的行動と捉える一方，ハプスブルク政権の政策を抑圧的であるとみなす。またクラークの所説とは異なり，「青年ボスニア」は「黒手組」に追従していたわけではないとする[90]。もっとも彼は，大戦前におこなわれたセルビア国内の組織による反ハプスブルク的なプロパガンダやハプスブルク要人に対する襲撃には言及していない。さらに暗殺直前にセルビア政府はウィーン駐在セルビア公使を通じてハプスブルク側に警告したにもかかわらず，ハプスブルク側が適切な対応を講じなかったと記した。しかしセルビア政府はどのような情報源に基づいて警告したのであろうか。

前出のビェラヤツは，クラークをはじめとする近年の修正派への疑問を呈する。彼によれば，主な開戦責任がドイツ，オーストリア側にあることは明白であり，さらにセルビア政府がフランツ・フェルディナント暗殺に際して「黒手組」と共謀したとの見立てを「愚か[91]」と断じた。彼は「黒手組」の関与を認めているが，セルビア政府は暗殺を察知していなかったと理解する[92]。サライェヴォ事件はハプスブルクの圧政に対する正当な行動であったこと，セルビア政府はサライェヴォ事件とは無関係であったことをおさえつつ，フィッシャー説に立脚して開戦責任はもっぱらドイツと旧ハプスブルクにあると述べる。さらにセルビアがいかに不当な形で「悪者」とされてきたのかについても強調した。

Č・アンティチは，国際社会のセルビア冷遇への不満を示す。第一次大戦戦勝90周年記念において，フランスはクロアチアには国旗掲揚を認めたにもかかわらず，セルビアにはそれを拒否したことに言及する[93]。また英国放送協会（BBC）の第一次大戦企画（2014年2月）においてセルビア有責論が優勢だったこと[94]，1990年代，開戦責任研究に生じた「重大かつ決定的な転換」によりセルビアは完全にヨーロッパにとっての「他者」と化したことにも触れる。彼の見るところ，かかる転換はボスニア内戦によって引き起こされたのである[95]。

本書の内容はセルビアの擁護，サライェヴォ事件の正当化などの論点では一貫してい

るが，セルビアにとって都合のよい材料を集めたにすぎない。それはハプスブルクの開戦責任を明白にするため，アメリカ大統領W・ウィルソンによるハプスブルク批判を切り取った編者ジヴォイノヴィチの論考に明らかである[96]。本書の問題点は，従来のセルビアの第一次大戦観にそぐわない事実をほぼ完全に排除した点につきる。具体的には，セルビア政府と黒手組の不明瞭な関係，黒手組による暗殺の幇助，黒手組や民族防衛団による破壊活動や暗殺未遂などには論及されない。さらに，「七月危機」においてフィッシャーがハプスブルクに与えた役割はドイツへの従属にすぎず，セルビア人研究者によるフィッシャーの援用は彼の所論を換骨奪胎した悪用である。クラーク書と同じく文献の恣意的な選択も目立つ[97]。『夢遊病者たち』と同様に『セルビア人と第一次世界大戦』も数多の問題を含むと言わざるをえない。

最後に筆者は，より妥当と思われる前出のズントハウセンの視点から本節をまとめておきたい。ズントハウセンは，第一次大戦開戦時のセルビアにおけるN・パシチ政権の責任を否定し，時のハプスブルクの要路者たちがサライェヴォ事件前からセルビアに対する予防戦争を準備し，実際には侵略戦争を防衛戦争と偽ったとする両大戦間期ユーゴスラヴィア王国の歴史家V・チョロヴィチの主張を支持する[98]。この点でいえば，彼はセルビアの立場を支持するようにみえる。

しかしながら彼は，開戦責任問題についてはセルビア側の主張がはらむ問題点を喝破した。①プリンツィプが黒手組に支援されていたこと。②黒手組がセルビア政府の統制下になかったこと。③セルビアにおける当該研究が以上の2点にほぼ言及しないことである。さらに当時のセルビアの政治家，軍人，知識人が「民族の自決権」を無視したうえで，歴史的権利や戦略的，経済的根拠などを混同し，マケドニアやコソヴォ，アドリア海沿海への進出を正当化したことに批判の目を向ける。セルビア側が一貫して主張する，ハプスブルクのボスニア併合の不当性，自衛のための戦いとしての第一次大戦の位置づけに関する次の一節も重要である。「ボスニア・ヘルツェゴヴィナをセルビア人の土地とみなす〔セルビア側の〕主張は，オーストリア・ハンガリーによる両地域の併合と同様に疑わしい。セルビアが〔オーストリア・ハンガリー〕二重帝国に脅威をおぼえていたことは理解できる。同様にオーストリア・ハンガリーがセルビアや南スラヴの扇動活動に脅威を感じていたことも理解できる。オーストリア・ハンガリーとセルビアは，各々の見解の中で「防衛戦争」と感じていた[99]」と。

セルビア人研究者が異口同音に述べるように，ハプスブルクの決断が大戦を引き起こしたことは疑いをいれないが，サライェヴォ事件の前にハプスブルクが戦争に動き出し

たわけではないことも確実である。セルビア人研究者は重視していないが，ハプスブルク側にとって経済的に独立したセルビアが自国の少数民族に「大きな吸引力」を及ぼすことは深刻な脅威であり，大戦直前のハプスブルクにとって「純粋に生き残ること」が死活的利害であったとするW・マリガンの視点も勘案すべきと考える[100]。

4　結　論

最後に本稿の内容をまとめるとともに，若干の展望を付しておきたい。プリンツィプの像はその後の政体の意向にあわせて加工され，広められてきた。とくに彼が政治的に利用されたのは，第二次大戦の直後からユーゴスラヴィアの「英雄」に祭りあげられた1950年代とセルビア内外においてセルビア人の「英雄」とされた冷戦終結後の時期と考えられる。大戦の追悼ではセルビアが断層線をなしている旨をすでに指摘したが，プリンツィプはセルビア人の英雄，自由の闘士となるとともに[101]，もっぱらセルビア人のために殉じたとみなされているといえる。さらにプリンツィプの評価の振幅に国際情勢が作用したこともすでに見たとおりである。

本稿の冒頭でセルビアとスルプスカ共和国が大戦勃発100周年の記念行事をボイコットした旨を書いたが，この両者は東サライェヴォ市にプリンツィプ公園を開設（2014年6月27日）し，プリンツィプの銅像を建立した[102]。さらにセルビアの首都ベオグラードにもプリンツィプの銅像（写真3）が建てられた際（2015年），前掲のセルビア大統領ニコリチは「ガヴリロ・プリンツィプは英雄，自由理念の象徴，暴君の暗殺者，隷属からの解放というヨーロッパ的観念の担い手」と激賞した[103]。もっともサライェヴォにおけるプリンツィプ像建立の発起人が前掲のビェラヤツであることは，政治と学問の近さを改めてわれわれに教えてくれる[104]。

一方，今日の暗殺現場には「1914年6月28日，ガヴリロ・プリンツィプはこの場所からオーストリア・ハンガリーの皇位継承者フランツ・フェルディナントと妻ゾフィーを暗殺した」と記された記念版が据えられている（写真4）[105]。さらにラテン橋のたもとには，フランツ・フェルディナント夫妻の追悼碑も「再建」された（写真5）。両大戦間期，第二次大戦後，そして今日の記念碑をたどるならば，プリンツィプとサライェヴォ事件をとりまく事情がわかる。

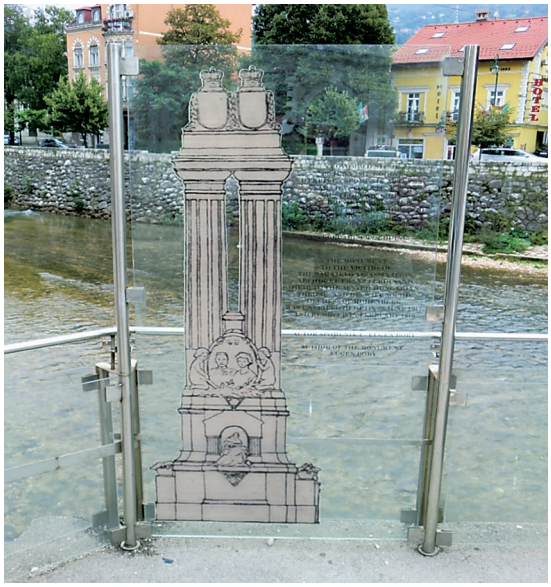
第一次大戦の開戦責任との関連では「セルビアの歴史学と社会が絶望的なまでに必要としているのは，自己批判的な熟慮[106]」とされるように，セルビアは自国の正当化に努

写真 3　ベオグラードのプリンツィプ像（撮影：上畑史氏）

写真 4　暗殺現場に設置された記念碑（撮影：筆者）

めている。今日の第一次大戦研究において開戦責任の追及はメインストリームではないが，セルビアでは消衰していない。この背景として，セルビアは「犠牲者意識」を抱き続けるなかで国際的孤立に苦しみ，EU 加盟への希望とコソヴォ独立，ロシアによる政治的，経済的支援の確保という外交的懸案に忙殺され，自国の立場を客観的に分析できていないこと[107]，その状況のもとでプリンツィプはボスニア内戦やコソヴォ紛争に比べると安全な政治的資源であることが想起される[108]。『セルビア人と第一次世界大戦』を読み解く際，われわれはかかる事情を顧慮するべきではなかろうか。

写真５　今日のフランツ・フェルディナント夫妻の記念碑（撮影：筆者）



また，旧ユーゴスラヴィア内戦とそれに伴うセルビアの「悪玉」化は，近年のやや過剰ともいえるハプスブルクの歴史的評価の高まりと表裏一体といえる。クラークは自著においてハプスブルクとセルビアを対比的に論じているが，ハプスブルクの復権は彼によるものだけではない。たとえば「1918 年以降の歴史のおかげで，民族主義者が「民族の牢獄」〔…〕と称した国にかつて住んでいた人びとの抱いていた皇帝フランツ・ヨーゼフ（在位 1848 － 1916 年）の帝国に対する思いは和らいだ。実際，ハプスブルク帝国は，そのかつての領域のあらゆる場所で郷愁の念とともに思い出してもらえる，おそらく唯一の帝国であろうが，このことは，その時代を生きた人びとにとっては意外に思われただろう[109]」とのE･ホブズボームの指摘はそれを端的に示している。先にあげたように，フィッシャーの流れを汲むガイスはハプスブルク施政をサライェヴォ事件の淵源として示唆していた。しかし 1990 年代半ばには，旧ハプスブルク帝国にかつて向けられた「諸民族の牢獄」という非難について「〔旧ユーゴスラヴィア内戦を経た〕現在と比べれば，まさに陽気な「諸民族の牢獄」であった」と記した[110]。ハプスブルクに対する彼の認識の軟化も現実政治に因るものと考えられる。

最後に筆者が目を向けたい事実は，2014 年 6 月 28 日がサライェヴォ事件の 100 周年ではあるが，大戦勃発の 100 周年とはいえないことである。仮に第一次大戦を 1914 年から 1918 年と区切るのであれば，開戦の日付はハプスブルクがセルビアに宣戦布告した 1914

年 7 月 28 日に定めるべきである。セルビア政府がハプスブルクによるセルビアへの宣戦布告文書を国連教育科学文化機関（UNESCO）の記憶遺産に申請した[111]ことは，ハプスブルクの侵略的行為を改めて強調するとともに，サライェヴォ事件を世界大戦の始まりと同一視することへの抗議と考えられる。サライェヴォ事件を含めた第一次大戦をめぐる記念日の抗争は，今後も継続してゆくことになるだろう。

【追記】

本稿は日本学術振興会 JSPS 科研費, 若手研究（19K13396）「第一次世界大戦前夜ボスニア・ヘルツェゴヴィナ施政にみるハプスブルク支配の諸相」（代表：村上亮，2019 ～ 2023 年），ならびに基盤研究 A（17H00935）「1918―19 年像の再構築―継続と変容―」（代表：大津留厚，2017 ～ 2020 年）の助成による成果の一部です。なお本稿で用いた写真を提供していただいた上畑史氏に深く御礼申し上げます。

注

1）池田嘉郎（2014）「第一次世界大戦をより深く理解するために」同編『第一次世界大戦と帝国の遺産』山川出版社，3 頁。

2）小関隆（2007）「記念日と記念行事をめぐる抗争」同編『記念日の創造』人文書院，8 頁。

3）Gregor Mayer.（2013）“Peinliches Gedenken, rebellische Ikonographie. Die Erinnerung an das Attentat von Sarajevo 1914 in Serbien und Bosnien”, *Donauraum*, Jg. 53-2, S.301.

4）ボスニア内戦を終結させたデイトン和平合意（1995 年 12 月）の結果，ボスニア・ヘルツェゴヴィナは，ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦（ボシュニャク人とクロアチア人が中心）とスルプスカ共和国（セルビア人が中心）の 2 つの主体から構成される国家となった。

5）開戦 100 周年の際には旧市庁舎の再開に加え，冬季オリンピック 30 周年，サライェヴォ・フィルムフェスティバル 20 周年，ヨーロッパ文化協定 60 周年，ツールドフランスのグランプリなどの行事が計画された。Tea Sindbæk Andersen.（2016）“Lessons from Sarajevo and the First World War: From Yugoslav to National Memories”, *East European Politics and Societies and Cultures*, vol.30-1, pp.47-48.

6）Anida Sokol.（2015）“The Contested Memory of the Sarajevo Assassination”, *The Proceedings of the “European Integration - Between Tradition and Modernity” Congress*, vol.6, p.620.

7）Alenka Bartulović.（2018）“Representing Gavrilo Princip: Tourism, Politics and Alternative Engagements with the Memory of the Sarajevo Assassination in Post-War Bosnia-Herzegovina”, *Traditiones*, vol. 47-1, p.179.

8）Karl Kaser.（2011）“Bosnien-Herzegowina unter Österreichisch-ungarischer Herrschaft. Eine Zwischenbilanz”, in Zijad Šehić（ed.）, *Međunarodna Konferencija Bosna i Hercegovina u okviru Austro-Ugarske 1878-1918*, Sarajevo: Filozofski Fakultet u

Sarajevu, pp.21-22. これに関しては以下も参照。村上亮（2017）『ハプスブルクの「植民地」統治――ボスニア支配にみる王朝帝国の諸相――』多賀出版，序論。

9）Paul B. Miller.（2014）“Yugoslav Eulogies: The Footprints of Gavrilo Princip”, *The Carl Beck Papers in Russian and East European Studies*, No. 2304, pp. 38-40. かかる分断はボスニアにおける学校教育でも認められ，教育上の「アパルトヘイト」と表現される。Sabrina P. Ramet.（2006）*The Three Yugoslavias: State-Building and Legitimation, 1918-2005*, Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, pp.482-483.

10）Mayer, “Peinliches Gedenken, rebellische Ikonographie”, S.292.

11）Sarah Sajn.（2018）“Securitizing a European Borderland: The Bordering Effects of Memory Politics in Bosnia and Herzegovina”, *Journal of Borderlands Studies*, vol.33, p.9; Jelena Subotić.（2017）“Terrorists are Other People: Contested Memory of the 1914 Sarajevo Assassination”, *Australian Journal of Politics and History*, vol.63-3, pp.375-376.

12）Aleš Skřivan, Sr.（2015）“（Book Review）Christopher Clark, The Sleepwalkers: How Europe went to War in 1914”, *Prague Papers on the History of International Relations*, 2015/1, p.142.

13）クリストファー・クラーク（小原淳訳）（2017）『夢遊病者たち――第一次世界大戦はいかにして始まったか』第 1，2 巻，みすず書房。

14）クラーク書の問題については以下を参照。村上亮（2019）「第一次世界大戦をめぐる開戦責任問題の現在――クリストファー・クラーク『夢遊病者たち』によせて――」『ゲシヒテ』第 12 号，35 － 43 頁。

15）フィッシャーはドイツが世界強国となるために，サライェヴォ事件を機に意図的に世界大戦を引き起こしたとする。現在もこの見方を支持する研究者も存在するが，「七月危機」におけるドイツの意図，役割に関する理解には反対する見方も多い。フリッツ・フィッシャー（村瀬興雄監訳）（1972，1983）『世界強国への道：ドイツの挑戦　1914―1918 年』第 1，2 巻，岩波書店。

16）クラーク『夢遊病者たち』128 － 135 頁。

17）Ismar Dedović / Tea Sindbæk Andersen.（2017）“Answering Back to Presumed Accusations: Serbian First World War Memories and the Question of Historical Responsibility”, in Tea Sindbæk Andersen / Barbara Törnquist-Plewa（eds.）, *The Twentieth Century in European Memory: Transcultural Mediation and Reception*, Leiden: Brill, pp.83-103.（引用は 98）セルビアにおける最も代表的な当該研究は A・ミトロヴィチの著作である。Andrej Mitrović.（2007）*Serbia's Great War: 1914-1918*, London: Hurst.

18）これはボスニア併合（1908 年 10 月）からサライェヴォ事件に至る時期に形成された革命運動をおこなった政治団体である。ボスニアの多民族構造を反映し，各宗派＝民族から構成され，明文化された規約や統一的な将来像を持ち合わせていたわけでもない。柴宜弘（1984）「オーストリア＝ハンガリー二重王国のボスニア統治と「青年」ボスニア運動」『史

観』110 号，81 － 85 頁。

19）Aleksandar Rastović.（2015）“Anglo-Saxon Historiography about the Responsibility for the Great War”, *Teme - Časopis za Društvene Nauke*, vol.2, pp. 582, 584. なお青年ボスニアとアルカイダの類似性を指摘したのは M・マクミランである。マーガレット・マクミラン（真壁広道訳，滝田賢治監修）（2016）『第一次世界大戦：平和に終止符を打った戦争』えにし書房，582 － 583 頁。

20）Holm Sundhaussen.（2018）“Das Attentat von 1914 und Österreich-Ungarn in der serbischen Erinnerungskultur”, in Helmut Rumpler / Ulrike Harmat（Hg.）, *Die Habsburgermonarchie 1848-1918*, Bd.12, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, S.231.

21）Mile Bjelajac.（2014）*1914-2014 Zašto revizija. Stare i nove kontarverze o uzrocima Prvog svetskog rata*（*1914-2014 Warum Revision. Alte und neue Kontroverse über die Ursachen des Ersten Weltkriegs*）, Beograd: Medija centar Odbrana, p.232.

22）Dragoljub R. Živojinović（red.）.（2015）*Srbi i Prvi svetski rat 1914-1918*（*The Serbs and the First World War 1914-1918*）, Belgrade: Srpska akademija nauka i umetnosti. 本論での注記ではセルビア語版も参照したうえで英語版の出典を記す。

23）Andersen, “Lessons from Sarajevo and the First World War”, p.42.

24）Jay Winter.（2017）“Commemorating Catastrophe: 100 Years on”, *War & Society*, vol.36-4, pp.242-245.

25）松本彰は，記念碑の歴史を考えるうえでの留意点として記念碑の作られた時代背景，記念碑の維持，記念碑を見た人の「受容」のあり方，記念碑の様式や意味の変化，外国の物も含む記念碑相互の比較の 5 つをあげる。今回はとくに時代背景に留意すべきであろう。松本彰（2012）『記念碑に刻まれたドイツ：戦争・革命・統一』東京大学出版会，17 － 18 頁。

26）Vojislav Bogićević.（1954）*Sarajevski atentat: izvorne stenografske bilješke sa glavne rasprave protiv Gavrila Principa i drugova, održane u Sarajevu 1914 g.*, Sarajevo: Državni Arhiv NR BiH, str. 72, 139. フランツ・フェルディナントの抱いていたとされる「三重制」については以下を参照。村上亮（2015）「皇位継承者フランツ・フェルディナント再考―政治権力と「三重制」を手がかりに―」『関西大学西洋史論叢』第 18 号，1 － 18 頁。

27）Bogićević, *Sarajevski atentat*, str.62.

28）Bogićević, *Sarajevski atentat*, str.401.

29）Gavrilo Princip（Mit Einführung und Kommentar von Martin Pappenheim）.（1926）*Gavrilo Princips Bekenntnisse. Zwei Manuskripte Princips. Aufzeichnungen seines Gefängnispsychiaters*, Wien: Zechner, S.11-17.

30）Robert J. Donia.（2014）“Iconography of an Assassin: Gavrilo Princip from Terrorist to Celebrity”, *Prilozi*, vol.43, p.59.

31）Donia, “Iconography of an Assassin”, pp.57-78, esp.58, 68; Husnija Kamberović.（2014）

"Commemoration of the First World War in Bosnia and Herzegovina", *Prilozi*, vol.43, pp.7-15.

32）ジョセフ・ロスチャイルド（大津留厚監訳）（1994）『大戦間期の東欧：民族国家の幻影』刀水書房，198 頁。

33）Katarina Todić.（2014）"In the Name of Father and Son: Remembering the First World War in Serbia", in Joachim Bürgschwentner et. al（eds.）, *Other Fronts, Other Wars? First World War Studies on the Eve of the Centennial*, Leiden: Brill, p.437.

34）Selma Harrington.（2014）"The Politics of Memory: the Face and the Place of the Sarajevo Assassination", *Prilozi*, vol.43, pp.121-122.

35）Stanislav Sretenović.（2016）"The 28 June 1914 between Serbian Memory and the Construction of Yugoslav Identity, 1918-1991", in Vahidin Preljevic / Clemens Ruthner（eds.）, *The Long Shots of Sarajevo" 1914: Ereignis - Narrativ - Gedaechtnis*, Tübingen: Narr Francke Attempto, p.587.

36）Melissa Bokovoy.（2001）"Scattered Graves, Ordered Cemeteries: Commemorating Serbia's Wars of National Liberation, 1912-1918", in Maria Bucur / Nancy Meriwether Wingfield（eds.）, *Staging the Past: the Politics of Commemoration in Habsburg Central Europe, 1848 to the Present*, West Lafayette, IN: Purdue University Press, pp. 248-250.

37）Miller, "Yugoslav Eulogies", p. 14. アレクサンドルの態度の背景には，彼の権力への執着と独裁的志向が考えられる。Dragan Bakić.（2017）"Regent Alexander Karadjordjević in the First World War", *Balcanica*, vol.48, pp.191-217, esp.213-214.

38）これに関しては一例として以下を参照。John Paul Newman.（2016）"Times of Death: The First World War and Serbia's Twentieth Century", in Nicholas Martin et al.（eds.）, *Aftermath: Legacies and Memories of War in Europe, 1918-1945-1989*, Abingdon: Routledge, pp.25-39.

39）フェイは，暗殺直前にプリンツィプら暗殺犯の不法越境を防がなかった当時のセルビア政府を「犯罪的な怠慢」と指弾したうえで，セルビア側によるハプスブルクへの暗殺に関する事前警告についても不十分であったとする。そのうえで彼は，「オーストリアに多くの責任があるとすれば，セルビアにも責任あり」と結んでいる。Sidney Bradshaw Fay.（1966）*The Origins of the World War*, 2 vol., New York, p.550.（本書の初版は 1928 年）大戦勃発時のセルビア教育相 L・ヨヴァノヴィチは，当時のセルビア首相 N・パシチが大公暗殺の計画を知っていたことを暴露した。またベオグラード大学の S・スタノイェヴィチは「黒手組」を詳しく論じた。これらの文献はセルビアの開戦責任の証として多用された。Slobodan G. Marković.（2015）"Anglo-American Views of Gavrilo Princip", *Balkanica*, vol.46, pp.279-280.

40）Miller, "Yugoslav Eulogies", p.21.

41）Rebecca West.（2007）*Black lamb and Grey Falcon*, New York: Penguin Books, pp.351-352.

42）Sretenović, “The 28 June 1914”, p.591; Harrington, “The Politics of Memory”, p.124.

43）Donia, “Iconography of an Assassin”, pp. 66-67; Husnija Kamberović.（2005）“Ubojstvo Franza Ferdinanda u Sarajevu 1914. devedeset godina poslije（The Murder of Franz Ferdinand in Sarajevo 1914 – Ninety Years Later）”, *Prilozi*, vol.34, str.14.

44）Krsto Lazarevic.（2016）“Hero or Foe? Gavrilo Princip and Memory Politics in Bosnia-Herzegovina”, in Edgar Wolfrum et al.（eds.）, *European Commemoration: Locating World War I*, Stuttgart: Institut für Auslandsbeziehungen, p.126. プリンツィプの生家は，大戦中にクロアチアにおけるナチの傀儡勢力，ウスタシャに破壊された。Miller, “Yugoslav Eulogies”, p.23.

45）出典は以下の通り。Miller, “Yugoslav Eulogies”, p.22.

46）Sretenović, “The 28 June 1914 between Serbian Memory and the Construction of Yugoslav Identity”, p.592.

47）スロボダン・プリンツィプ（1914 － 1942）は第二次大戦前から共産党の活動家であり, 1941 年 7 月のボスニアにおける反乱に積極的に加担していた。1942 年冬にチフスにて死亡したものの，民族的英雄に列せられた。Slobodan G. Markovich（2015）, “Coping with the Memory of Gavrilo Princip and the Symbolism of Vidovdan in Serbia and Yugoslavia”, *The South Slav Journal*, vol.34-1/2, pp.42-43.

48）Alojz Ivanišević.（2015）“Der Mythos der nationalen Befreiung im südslawischen Raum während des Ersten Weltkriegs und dessen Wirkungsgeschichte bis heute”, *Der Donauraum*, Jg.53-2, S.188. さらに時のユーゴスラヴィアがソヴィエト連邦を凌駕する弾圧機関をそなえていたこと，ユーゴスラヴィア国家の多民族的な性格が「戦争体験が生んだ苦い遺産をさらに複雑にした」ことも看過すべきではないだろう。トニー・ジャット（森本醇訳）（2008）『ヨーロッパ戦後史 上 1945 － 1971』みすず書房，220 － 221 頁。

49）ソ連は 1948 年 6 月 28 日，ユーゴスラヴィアを以下の理由からコミンフォルム（共産党情報局）から追放した。①意識的反ソ政策，②農業集団化の遅れ，③党外大衆のなかへの党の埋没，④友党に対する尊大な態度である。これを契機に，東側諸国においてティトー主義者と目された人々の粛清が相次いだ。岩田昌征（1994）『ユーゴスラヴィア：衝突する歴史と抗争する文明』NTT 出版 , 157 － 158 頁。

50）Ljubodrag Dimić.（2014）“Serbian Historiography on the Great War”, in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, pp.400-401.

51）Miller, “Yugoslav Eulogies”, p.25.

52）Harrington, “The Politics of Memory”, p.128. プリンツィプの足跡の意義については，後年，サライェヴォ市民が次のように回想する。「サライェヴォに来てガヴリロの足跡に立ち寄らざるは, あたかもパリに来てエッフェル塔に登らないようである」と。Miller, “Yugoslav Eulogies”, p.27.

53）Sretenović, “The 28 June 1914”, p. 595. なおここでは，ユーゴスラヴィアにおけるプリンツィプ評価の変化は 1960 年代に始まっていたことに留意しておきたい。つまりボスニア共

産党の中核を占めていたセルビア人が次第に勢力を失い，プリンツィプの崇拝に必ずしも積極的ではない，後のボシュニャク人にあたるイスラム教徒がそれに取って代わったためである。Markovich, “Coping with the Memory”, pp.52-53.

54）Vladimir Dedijer.（1966）*The Road to Sarajevo*, New York: Simon and Schuster, p.175.

55）デディエールは，プリンツィプとコソヴォの戦いでスルタンを暗殺したM・オビリチを意図的に結びつけている。Ivan Čolović.（2016）“Das Attentat von Sarajevo und der Kosovomythos”, in Preljevic / Ruthner（eds.）, *The Long Shots of Sarajevo*, pp.59-76.

56）A. J. P. Taylor.（1971）*The Struggle for Mastery in Europe, 1848-1918*, Oxford: Oxford University Press, p.520.（Note.2）

57）一例として以下を参照。Milorad Ekmečić.（1991）“The Emergence of St. Vitus Day as the Principal National Holiday of the Serbs”, in Wayne S. Vucinich / Thomas A. Emmert（eds.）, *Kosovo: Legacy of a Medieval Battle*, Minneapolis: University of Minnesota, p.340.

58）Sundhaussen, “Das Attentat von 1914”, S.228. 開戦責任論争をたどったJ・W・ラングドンは，大戦勃発の責任がセルビア政府にはないと記している。John W. Langdon.（1991）*July 1914: the Long Debate, 1918-1990*, New York: Berg, p.176.

59）Marković, “Anglo-American Views of Gavrilo Princip”, pp.296-297. cf. Imanuel Geiss.（1984）“Origins of the First World War”, in H. W. Koch（ed.）, *The Origins of the First World War: Great Power Rivalry and German War Aims*, London: Macmillan, pp.46-85, esp.79-85.

60）1995年7月11日，ボスニア東部のスレブレニツァでボシュニャク人男性およそ7000名がセルビア人により虐殺され，証拠隠滅のために遺体が埋却された事件。初めて旧ユーゴスラヴィア国際戦犯法廷がジェノサイド罪を適用した事例である。佐原徹哉（2008）『ボスニア内戦―グローバリゼーションとカオスの民族化―』有志舎，310頁。

61）塩川伸明（2011）『民族浄化・人道的介入・新しい冷戦：冷戦後の国際政治』有志舎，27頁。ボスニア内戦については以下も参照。月村太郎（2006）『ユーゴ内戦―政治リーダーと民族主義』東京大学出版会。また次の百瀬亮司による解説は大変有益であり，教えられるところが多かった。百瀬亮司（2014）「解説Ⅰ 紛争の「記憶」という呪縛――「民族浄化」後の旧ユーゴスラヴィア諸国」ノーマン・M・ナイマーク（山本明代訳・山本明代，百瀬亮司解説）『民族浄化のヨーロッパ史：憎しみの連鎖の20世紀』刀水書房，268 － 293頁。

62）定形衛（2000）「コソヴォ紛争とNATO空爆」『国際問題』第483号，27 － 40頁。

63）大セルビア主義は次のように定義される。「セルビア人の居住するすべての地域を統合しようとする政治思想。1844年にセルビア公国の内相ガラシャニンが発表した「ナチェルターニェ（構想）」がその基礎となり，第一次大戦前にはセルビア王国の首相・外相のパシッチにより明確な政治方針とされ，オーストリアとの敵対を深めた」。柴宜弘（2001）「大セルビア主義」西川正雄［他］編『角川世界史辞典』角川書店，553頁。

64）同書においてV・クレスティチは「〔セルビア人は〕古代から中世を経て，より大きな，民

族的に純粋な国家を形成しようとする覇権主義者たちであった。またその野望がユーゴスラヴィア解体にまつわる近年の危機においてセルビア人を駆り立てており，したがってセルビア人こそがこれらのバルカンにおける諸悪の主犯である」ことの証明が，欧米各国で試みられていると論じた。Vasilije Dj. Krestić.（ed. / trans. Boško Milosavljević）（2004）*Great Serbia: Truth, Misconceptions, Abuses*, Belgrade: Cicero, p.7. 同書ではかつてのハプスブルク帝国によって創出された「大セルビア」が近年になって悪用されている旨も論じられる。Slavenko Terzić.（2004）“Austro-Hungarian Myth about the "Great Serbia" and its Modern Utilization”, in Krestić（ed.）, *Great Serbia*, pp.181-193.

65）Tadić Ljubomir.（2004）“"Great-Serbian Hegemonisum" as a Stereotype”, in Krestić（ed.）, *Great Serbia*, p.128.

66）定形衛（2017）「旧ユーゴスラヴィアの遺産と現代セルビア外交」『名古屋大學法政論集』第 269 号, 227 － 247 頁（とくに 243 － 245 頁）; Jelena Subotić.（2013）“Stories States Tell: Identity, Narrative, and Human Rights in the Balkans”, *Slavic Review*, vol. 72-2, pp.310-311, 317.

67）Marković, “Anglo-American Views of Gavrilo Princip”, pp.303-304. もっともセルビア人が意識的にプリンツィプを引き合いに出していたことも看過できない。前出のスレブレニツァの虐殺を引き起こしたセルビア軍の司令官ムラディチは，旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷において「私はプリンツィプと同じように同胞のために命をささげたのだ」と叫んだという。Subotić, “Terrorists are Other People”, p.378.

68）Aleksandar R. Miletić.（2016）“1914 Revisited. Commemoration of the WWI Centenary in Serbia”, in Egry Gábor（ed.）, *Memory and Memorialization of WWI in Eastern and Southeastern Europe*, Budapest: Napvilág Kiadó, pp.25-26.

69）塩川『民族浄化』2 － 3 頁。

70）Markovich, “Coping with the Memory”, p.55.

71）ハプスブルクがサライェヴォ事件からセルビアに宣戦布告するまでの経緯については以下を参照。村上亮（2017）「オーストリア＝ハンガリー二重君主国による「最後通牒」（1914 年 7 月 23 日）再考― F. ヴィースナーの『覚書』にみる開戦決断の背景―」『境界研究』第 7 号，1 － 24 頁。

72）Marie-Janine Calic.（2014）“Kriegstreiber Serbien? Die Südslawen und der Erste Weltkrieg: eine Richtigstellung”, *Osteuropa*, Jg.64-2/4, S.43-58. ミトロヴィチ文献については注 17 を参照。

73）クラーク『夢遊病者たち』696 － 697 頁；Peter Becker.（2016）“Streit über die Verantwortung. Karl Kautsky und Hermann Kantorowicz versus Christopher Clark”, *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, Jg. 64-7/8, S. 659. 常設仲裁裁判所の設置に対するドイツの消極性は以下でも指摘される。マクミラン『第一次世界大戦』340 頁。

74）マーク・マゾワー（井上廣美訳）（2017）『バルカン：「ヨーロッパの火薬庫」の歴史（中公新書）』中央公論新社，7 － 10 頁。

75）クラーク『夢遊病者たち』18 頁。

76）Johann Dvořák.（2015）“Der Mythos von den barbarischen Serben und seine Folgen”, *Der Donauraum*, Jg.53-2, pp.178-179.

77）Hew Strachan.（2014）“The Origins of the First World War（Review Article）”, *International Affairs*, vol.90-2, p.435.

78）Dejan Djokić.（2015）“Bosnian Daydreamers（Review）”, *History Workshop Journal*, vol.80, p.309.

79）Miletić, “1914 Revisited”, p.17.

80）Miletić, “1914 Revisited”, pp.8-9, 13.

81）Rastović, “Anglo-Saxon Historiography”, p.590.

82）Mira Radojević / Ljubodrag Dimić.（trans. Jovanović Mirjana）（2014）*Serbia in the Great War: 1914 - 1918. A Short History*, Beograd: Srpska Književna Zadruga, pp.5-8.

83）Dragoljub R. Živojinović.（2014）“Opening Address: Dragoljub R. Živojinović, President of the Organizing Committee”, in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, pp. 17-19.（引用は 19）

84）Tomislav Nikolić.（2014）“Welcome Address: H. E. Tomislav Nikolić President of the Republic of Serbia”, in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, pp.9-11.

85）Nikolić, “Welcome Address”, p.13. 同文書はポティオレクからボスニア行政を職掌した共通財務大臣 L・ビリンスキ宛のものである。

86）Nikola Hajdin.（2014）“Welcome Address: Nikola Hajdin, President of the Serbian Academy of Sciences and Arts”, in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, p.15.

87）Marković, Slobodan G., “Serbia’s War Losses during the Great War reconsidered”, in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, pp.380-381.

88）ルヌーヴァンは，①については「かかる空想的な解釈は，信頼できる文書によりあらゆる細部にいたるまで否定される」（pp.14-15），②についてはハンガリー警察やハプスブルク王室が暗殺に関与した証拠はない（pp.15-18），③についてはフランツ・フェルディナントを南スラヴ民族の敵とみなした暗殺者たちの動機に疑義を呈している（p.18）。これらをエクメチチは十分に示していない。Milorad Ekmečić.（2014）“Sarajevo 1914: Reassessment”, in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, pp.21-42. ルヌーヴァン書の出典は以下の通り。Pierre Renouvin.（trans. Theodore Carswell Hume）（1928）*The Immediate Origins of the War*（*28th June-4th August 1914*）, New York: H. Fertig.

89）Okey Robin.（2011）“Overlapping National Historiographies in Bosnia-Herzegovina”, in Tibor Frank / Frank Hadler（eds.）, *Disputed Territories and shared Pasts: Overlapping National Histories in Modern Europe*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, pp.366-367.

90）Dušan T. Bataković.（2014）“The Young Bosnia and the "Black Hand"”, in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, p.152.

91）Mile Bjelajac.（2014）“Centenary: Revisionist Interpretations of the Causes of the Great

War", in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, p.423.

92）修正派の抱える問題として以下の諸点があげられる。①修正派の見解は，新たな史料に基づくものではなく，すでに先行研究で明らかにされた事実は却下されていること。②新説を揺るがせるような論拠はすべて閑却されていること。③大半の研究者は「修正派」に賛同していないこと。④大戦を「全般的な不幸」とみることは，当事者全員の過失を同じ水準におくことになること。さらにこの見方はロシアとの関係のなかで，セルビア・ナショナリズムを開戦原因のひとつに数えるものであることである。Bjelajac, "Centenary: Revisionist Interpretations of the Causes of the Great War", pp.421-422.

93）Čedomir Antić.（2014）"The Alleged Responsibility of the Kingdom of Serbia for the Outbreak of the First World War: Recent Interpretations", in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, p.457.

94）当該番組では，10 人の研究者に第一次世界大戦勃発の責任を照会した。10 人中 9 人はドイツに主な原因があるとしたが，R・J・エヴァンス，G・ヒルシュフェルト，S・マクミーキンの 3 人はセルビアにも多かれ少なかれ何らかの責任があるとした。

95）Antić, "The Alleged Responsibility of the Kingdom of Serbia", pp.453-454.

96）ここでは第一次大戦中にアメリカが抱いていたハプスブルクに対する政策構想などにはほとんど触れられていない。Dragoljub R Živojinović.（2014）"Woodrow Wilson on the Austro-Hungarian Responsibility for the Outbreak of the War 1914-1918", in Živojinović（ed.）, *Serbs and the First World War*, pp.109-113.

97）大戦の開戦原因に関する基本文献であり，セルビア政治における軍部の影響力，民族主義団体の設立，テロリズムと暗殺の伝統による政情の不安定化に言及した J・ジョル，大戦中に粛清された「黒手組」がいわば名誉回復されるまでの経過を詳らかにした D・マッケンジーの文献はほとんど使われていない。ジェームス・ジョル（池田清訳）（1997）『第一次世界大戦の起原（改訂新版）』みすず書房；David MacKenzie.（1998）*The Exoneration of the "Black Hand": 1917-1953*, Boulder: East European Monographs.

98）Sundhaussen, "Das Attentat von 1914", S.235-236. cf. Vladimir Ćorović.（1936/1992）*Odnosi između Srbije i Austro-Ugarske u XX veku*.（Beziehungen zwischen Serbien und Österreich-Ungarn im 20 Jahrhundert）, Beograd: Biblioteka grada Beograda.

99）Sundhaussen, "Das Attentat von 1914", S.239.

100）ウィリアム・マリガン（赤木完爾，今野茂充訳）（2017）『第一次世界大戦への道：破局は避けられなかったのか：1871 ～ 1914』慶應義塾大学出版会，121，137 頁。これに関しては村上「「最後通牒」再考」も参照。

101）Winter, "Commemorating Catastrophe", pp.242-243.

102）この式典に出席したボスニア・ヘルツェゴヴィナ大統領評議会（セルビア系）N・ラドマノヴィチは「プリンツィプの銃弾は自由のために発射された。彼の銃弾は，いくつかのヨーロッパの国々が準備していた戦争の序曲となった。セルビア人はその戦争の勝者として出現した」と述べた。そのうえで暗殺の起きた 6 月 28 日は犠牲を追憶し，自由のため

の闘争の日であると強調するとともに，歴史を書き換える試みに対して警鐘を鳴らしている。http://www.b92.net/eng/news/region.php?yyyy=2014&mm=06&dd=27&nav_id=90812（2019 年 8 月 15 日確認）

103）http://www.b92.net/eng/news/society.php?yyyy=2015&mm=06&dd=29&nav_id=94588（2019 年 8 月 15 日確認）

104）Mayer, “Peinliches Gedenken, rebellische Ikonographie”, S.291-292.

105）Harrington, “The Politics of Memory”, p.132.

106）Miletić, “1914 Revisited”, p.32.

107）定形「旧ユーゴスラヴィアの遺産」247 頁。

108）コソヴォ問題を政治的に利用していたS・ミロシェヴィチの失脚後，コソヴォ神話は政治の舞台から消えたという。Florian Bieber.（2002）“Nationalist Mobilization and Stories of Serb suffering: The Kosovo Myth from 600th Anniversary to the Present”, *Rethinking History: The Journal of Theory and Practice*, vol.6-1, p.107.

109）エリック・ホブズボーム（木畑洋一［他］訳）（2015）『破断の時代：20 世紀の文化と社会』慶應義塾大学出版会，118 － 119 頁。

110）Imanuel Geiss.（1996）“Deutschland und Österreich-Ungarn beim Kriegsausbruch 1914. Eine Machthistorische Analyse”, in Michael Gehler（Hg.）, *Ungleiche Partner?: Österreich und Deutschland in ihrer gegenseitigen Wahrnehmung: Historische Analysen und Vergleiche aus dem 19. und 20. Jahrhundert*, Stuttgart: Franz Steiner, S.378. なおハプスブルクの歴史的評価については以下を参照。村上『「植民地」統治』序論。

111）Nomination form International Memory of the World Register. Telegram of Austria-Hungary’s declaration of war on Serbia on 28th July 1914.　http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CI/CI/pdf/mow/nomination_forms/serbia_telegram_eng.pdf（2019 年 8 月 15 日確認）